第224回　イッツフォーリーズ公演　　2026年7月

「ミュージカルピエタ」
感　想　文　集

ＮＰＯ法人　ふなばし演劇鑑賞会

子どももミュージカルを出来るのは、多大なる成長に期待。感動と社会を楽しめたので、これはぜひ友にも見せたいと思えた。

（ジャンプ　中川護　中学2年）

最初、物語の終盤に母が出て来て…みたいな感じだと思ったけど、けっこう最初に母と会って、回想もふまえつつ考えてたら、母はサイテーで、ともこがかわいそうなどと思ったけど、最後まで観たら、すごく考えも人物に対しての思いも変わって、母は悪い所もあったけど、ともこ思いの母親で、ともこはせっかち？のような部分もあるが、母についての話（真実）を知って、母についての考えなどを改めて、最後仲直りできたみたいなので、よかったなと思った。

（ジャンプ　中川みどり　小学6年）

思い描いた人生を歩める人は多くはないが、ある種の気付きや反省があれば、幸福を手に入れられるという意味の物語である。浅田次郎の原作は、母親と娘との愛憎と和解の話だが、ミュージカルピエタは、それよりもはるかに感動的に仕上がっている。娘の友子とフィアンセのリーとの関係を丁寧に描いていて、最後は友子とリーの娘の旅立つ場面まであったので、安心して感動にひたることができた。子供だった友子に語らせ、アンサンブルとダンスで盛り上げ、時代を超えてミケランジェロまで登場させる離れ技。ピアノとサックスなどの生演奏。照明も含めて印象的な舞台になっている。申し分ないと思った。

（ハッピープリンス　春日井治　70代）

「イッツフォーリーズ」の歌声は見事であった。中でも少女役（門前りりかと大草愛咲のダブルキャスト）の、澄んでよく会場に響く歌声と、かの大巨匠ミケランジェロ（だったと記憶する）を演じた俳優さんの堂々たる歌声が記憶に残った。

ひとつ最後まで疑問を残したことは、「ピエタ」とは（哀れみ－pityの類似語）であり、本来は十字架に架けられて息絶えた後に降ろされた息子キリストと、彼を膝に抱き悲しむ聖母マリアの像であるが、なぜキリストではなく少女が登場するのか？という点であった。また、劇中で言及されるサンピエトロ寺院のミケランジェロ作のピエタ像は私も見たことがある。素晴らしかった。サンピエトロ寺院の建築も素晴らしい思い出である。バチカン芸術のすばらしさを再び伝えてくれるミュージカルのようで、日本からのバチカン芸術とミケランジェロ賛美の劇と、最初には私にはそう見えた。だが、なにも既成事実に拘る必要もない。この日本製の「ピエタ」は、幼子キリストを抱く「聖母子像」をプラスし、「ピエタ像」の持つ受難のキリストを嘆く母の悲しみと慈愛の顛末は省いて、幼子キリストの代わりに幼い少女を出場させ、母と娘の関係に転換した。そして自由に生きる母の姿をプラスした。「いい子でいてね」の一言を残して娘（友子）を置いてイタリアへ旅立ったまま帰らない母。娘はいい子でいるように努力しつつ大人になり、長じてイタリアでガイドをしている母に出会う。他方、今は大手雑誌の女性編集長になっている娘友子には、李さんという中国人の男性が付き添う。李さんは正直でキリストのように清いという印象であった。その清さを、友子の娘？あるいは幼いころの友子（と私は解した）である、前述の少女の壇上のアリアの、響く澄んだ声が代弁した。観客には、友子を去ったガイドの母親の、「いい子でいてね」の言葉が響いたに違いない。その言葉が一種の清さとなって劇に貢献した。

幼子キリストを少女に替えたのは本劇の特色である。そしてひたすらキリストの死を嘆く聖母マリアの代わりに、俗世を生き抜き仕事もする「母」

の自由をプラスした、現代的な面白い独創的なミュージカルであった。そして、母という女性のやさしさばかりではなく、この世には、困窮にある時、助けてくれるキリストの化身のような？男性もいると知った観劇日であった。困った人を助ける行為、あるいは総じて慈悲とも言う。（ことの葉　水崎野里子）

ミュージカルを初めて見て、私は、最初に出てきた女の子がとても孤独に見えて、見ていて、とても胸が痛みました。最初は女の子が出てきてどういう物語なのかと不思議に思いながら見ていました。ですが、物語が進んでいくにつれて、最初に女の子が出てきて、お母さんが出てきたのは、親子の物語なんだと分かってきました。最後の場面では、お母さんは、女の子を愛していなかったんじゃなくて、本当は手紙を書いて女の子の送ろうとしていたり、考えていて、二人が再会できて良かったし、親子のきずなは簡単には切れないなと思い、とても感動しました。また、ミュージカルで演じている方々が表情や声に感情をのせて歌っているように見えて、とてもすてきでオペラ歌手のようなきれいな声が心に残りました。とてもすてきだったのでまた見たいと思いました。

（グレート　伊藤海優　高校一年）

感動した！後半、涙が止まらなかった。私は何で泣いているんだろう…何に感動してるんだろう…一日経って思い返している。

まず、一つ目は、歌、そのもの！歌声の素晴らしさだけでなく、子ども時代と大人に成長した友子の、それぞれの歌が交差し、リンクし、話が展開していく脚本の面白さが浮き彫りになる。想いを歌にのせて母親への思慕を訴えていく優れた曲。まるで息をするように歌い始める生演奏ならではの醍醐味。（思わずオーケストラBOXを探してしまった(笑)）そして歌の持つ力に感嘆する。私もコーラスが趣味だが、心が揺さぶられるように歌いたいものだ。

二つ目に、リーさんのセリフ。そのセリフ一つひとつは『全てを包み込む無償の愛情』であり、その言葉が、想いが、頑なだった友子の心をほぐしていく…

人間って、なんてステキな生き物なんだろうと愛おしくなった。私自身の気持ちとからまって涙が止まらない。

三つ目は、舞台装着やダンスの効果。ダンスが町の様子になり、感情の揺らぎにもなり、ピエタの作品にもなる、その見事な演出！終わった直後に、「なんて素晴らしい劇でしょう！」と、隣の人に思わず話しかけてしまった。互いに赤い目で見合って(笑)話が弾んだ。

ミュージカルって、劇団四季の作品しか知らないのですが…このピエタの脚本の奥深さと、前から4番目の迫力感じる。席ゆえか、歌が体に染みてくるようでした。これからのご活躍を期待してます❗

素晴らしい作品をありがとうございました！世界中の人に観てもらいたい‼

（亜童夢　伊澤輝美）

森進一はかつて古賀政男に、「歌は語れ、語りは歌え」と指導されたと語っていました。確かに森進一の歌は、語るようにゆっくりと情感が溢れ出てくると思わせてくれます。

翻って、「語りは歌え」の方は、どういう意味なのか長らく不明でしたが、本公演を観て、納得がいきました。元々私はミュージカルにあまり馴染みがなかったのですが、役者さんの押しつけがましさのない自然に感じ取れる表現力は、まさに「語りは歌え」を体現していると感じ入りました。

又、本劇団は、元々いずみたくさんが創られたものとか。私も素人ながら聴いていて、氏のDNAが随所に引き継がれていると思いました。かの昭和30年代、NHKで「夢で逢いましょう」という番組がありました(こちらは中村八大ですが)。大人のゆっくりとしていて気品のある番組展開でしたが、本ミュージカルを観ていて奇しくもあの頃を思い出しました。会場には、ミュージカル大好き、イッツフォーリーズ大好きという方が多いようでしたが、私もその一人に加わりそうです。

（富士桜　朝日崇　70代）

たくさんの愛を感じ、ほっこりとした幸せな気持ちになりました。生の音に素晴らしい歌声に打ちのめされ、心に沁みたあふれる愛に涙がとまらなかったです。素敵なひとときでした。ありがとうございました。

（パンプキン　簗瀬かお理　60代）

声が良かった、リーさんすてきです。イッツフォーリーズ、久しぶりでした。ミュージカル大好きとおっしゃる会員の方がたくさんいらっしゃるでしょうが、私もその一人です。最後、ハッピーエンドすっきりしました。

（下田美恵　60代）

月曜夜に申し込んでいたのが来られなくなり、火曜(二日目)に観せていただきました。ミュージカル(個々の役者さん、また全体が一体化した姿に)が発するエネルギーが伝わってきました。素晴らしい時間を過ごせていただきま

した。たまたま二日目に観て、交流会にも出られ、さらに感動をいただきました。（小枝　タハラ　70代　女）

涙々のミュージカルでした。素晴らしい声量、素晴らしい生演奏にホントに来て良かった！これからも心に響くミュージカル期待しています！ありがとうございました。（無記名）

私は、捨てられたわけではないですが…年代も近くて、1人で上京して、家族と離れて暮らしているので友子に共感できる所が多かったです。生演奏とは思っておらず、とっても音楽が素敵でした！歌がとっても良かったです！1つ、おじいちゃんが梨畑やっているのは偶然だったのか。他の作品でも日替わりで「なし」としてくれることが多いのでそこが気になりました。（おひさま　二村真衣　20代）

イッツフォーリーズのミュージカルは、分かりやすくて好きだ。今年は浅田次郎原作の『ピエタ』。敢えて原作は読まなかったが、母と娘の出会いと別れの物語だろうと想像していた。

だが、意外なストーリー展開。やはり母娘の絆はそう簡単に切れるものではない…と、安心する場面もあり、同時に人を愛する心を知っている人と出会った事で、主人公のトモコも変わって行く。何度も泣いてしまった。同行した孫たちも感動したようだ。最後まで鑑賞出来ただけでも嬉しい。（ジャンプ　藤井雪枝）

ミュージカル作品は話の筋よりも、いかに歌い、いかに踊るかで観客を愉しませ、ピアノと笛（サックス？）のみごとなミュージックの流れを味わい、まるで夢の世界を見ているようなひとときを観じとることなのだと、遅まきながら今回はっきりわかった気がした。数人の男女が舞台中央で歌いながら踊る芝居は、話の流れを豊かに包み込んでしまうようだ。この「ピエタ」像の作者ミケランジェロが母と死に別れたのが6歳、友子が母チヨコに捨てられたのも6歳。そして友子の願いで二人は24年後にピエタのまえで遭遇したというドラマ、生き別れの母子再開の会話もサバサバしてリアルだったが、むしろ仮の友子の新夫？リー役の神田恭兵君が微妙な立場を健気にバリトン？で歌ったりして演じ切って魅せてくれ、オドオドした若いころの自分を見ているようで微笑ましくながめていた。そういえば、ヨーロッパに若かりしころ一人旅行したとき、バチカンにピエタ像があるなどと知らずに通りがかって、その美というか光といおうか、マリア様の美しい愛おしんだお顔に吸いつけられて、生きている慈母と錯覚して見つめてしまったのか、しばらくピエタのまえから動けなくなったことを想い出した。つまり、マリア様はイエスの母ばかりではなく、すべての人の母なのだとミケランジェロはいっているのだ、とあらためてピエタをながめて思えてきたのだ。ともあれ、歌って踊って美しく楽しい舞台をありがとう！イッツフォーリーズ殿（マゴメ　ムラタ）